# 日本海海戦　東郷平八郎と秋山眞之

平成14年1月12日・高根台公民館

日露戦争と云えば、ここにいらっしゃる皆さんはすぐ「陸の乃木希典、海の東郷平八郎」を思い出されると思います。ところが今の若い人は、乃木神社、東郷神社は知っていても、乃木さんも知らなければ、東郷さんも知らない人が多いようです。八年ほど前でしたか、ある雑誌に載った当時の国連事務総長ガリさんの写真を見て、びっくりしたことがあります。それは日本での忙しい日程の合間を縫って、夫人と一緒に東郷神社を参拝している写真でした。ガリさんは小学生の時、エジプトの教科書に載っていた日本海海戦のことを読んで感激し、東郷さんを尊敬するようになったと云うのです。来日の都度必ず東郷神社を参拝し、その時は五回目だったそうです。

この写真の東郷さん、随分勲章をいっぱいぶら下げていますが、ほとんどが外国からもらったもので、それほど東郷は外国では有名人なのです。これは「アミラーリ」、「提督」と云う名前のオランダのビールですが、ラベルの肖像画は紛れもなく東郷です。ちゃんと平八郎・東郷、一八四七年に生まれ一九三四年に亡くなったとあります。もともとはフィンランドのビールで、「東郷ビール」として有名ですが、フィンランドのようにロシア帝国にいじめられたり、侵略されたりした国では、ロシアのバルチック艦隊を破った東郷は英雄であり、日本海海戦は当時「東洋の奇跡」と称賛された戦いだったのです。ガリさんのエジプトはイギリスの植民地でしたが、長い間白人に支配され続けてきた感情が、「アジアの国日本が白人の国ロシアを破った」と云うので、子供心に大きな感動を呼んだのでしょう。

かんじんの日本はどうでしょう。東郷の名前は敗戦と共にすっかり忘れられていて、小学校六年の社会の教科書に登場するようになったのは、やっと十三年前のことなんです。平成元年の新しい学習指導要領で、「歴史学習で取り上げるべき人物」四十二人の一人として東郷の名前が出てきたのですが、さっそく平和団体が「軍国主義の復活だ」と噛み付きました。ちょっと前の中学や高校の歴史の教科書を見ても、「日本海海戦に敗れたロシアは、日本との講和を急ぐようになった」とあるだけで、東郷の名前は全く出てきません。これでは戦後生まれの方が東郷を知らないのも無理はないのですが、どうも「二度と戦争をやってはいけない」ということで、歴史的な事実までことさらに目をつぶってしまった感じがします。

それはともかくとして、ガリさんを感激させた日本海海戦とは一体どんな戦いだったのでしょうか。戦いの規模、結果の重大さから見て、世界で大海戦といわれるものは三つあります。まず紀元前四八〇年、劣勢を伝えられたギリシア・アテネの艦隊が、クセルクス大王のペルシア大艦隊を破ったサラミスの海戦です。次が日本海海戦のちょうど百年前。一八〇五年十月、ジブラルタル海峡の出口、トラファルガー岬の沖合で、ネルソン提督率いるイギリス艦隊が、フランスとスペインの連合艦隊を破ったトラファルガーの海戦です。ネルソンはこの戦いで戦死しましたが、敗れたナポレオンはイギリス本土上陸作戦を断念せざるを得なくなり、以後海の支配権を握ったイギリス隆盛の道が開かれました。ですからネルソンは救国、国を救った英雄であり、ロンドンの中心街にはトラファルガー広場が作られて、ネルソンの銅像が一際高く聳えているのです。今でも十月二十一日は「トラファルガー・デー」と称して、イギリス人の集まる所必ずディナー・パーティーが開かれ、ネルソンに感謝の杯を上げるのだそうです。

そして三番目が明治三十八年五月二十七日、東郷平八郎率いる日本艦隊が対馬沖でバルチック艦隊を破った日本海海戦です。戦前は五月二十七日が海軍記念日でした。敗戦で海軍と共になくなったのは仕方がないとしても、三大海戦の中でこれほど完璧な勝利はなかったし、逆にもし日本が敗れていたら対馬は勿論、恐らく北海道もロシア領になっていたでしょう。そして何よりも、白人に支配され続けてきたアジア人に、大きな勇気と希望を与えた戦いだったことを考えると、この戦いのことがもう少し知られていてもいいように思います。

それではこの日露海軍の決戦を前に、世界はどう見ていたのでしょうか。実は「ロシア優勢」の声が圧倒的に強かったのです。時のアメリカ大統領、日本びいきで海軍通で知られたセオドア・ルーズベルトでさえ、親しい友人に宛てた手紙で「日本勝利の可能性はせいぜい二〇%だろう。日本艦隊が敗れた場合、日本は滅亡の悲運に遭遇するであろう」。こう書いていたくらいでした。根拠は戦艦の数の違いです。日本は海軍大臣山本権兵衛が戦艦六隻、一等巡洋艦六隻のいわゆる「六六艦隊」を作ってこの戦争に入りましたが、初瀬、八島の二隻がロシアの機雷に触れて沈没し、戦艦は四隻に減っていました。対するバルチック艦隊は二倍の八隻です。当時の海上決戦は、大きな軍艦、大きな大砲をいかに数多く持っているかで決まる。これが常識でした。八吋以上の大砲の総数はほとんど同じなのですが、一番大きな十二吋砲は二十六門対十六門、その下の十吋砲に至っては十五門対一門。大きな大砲は圧倒的にロシアが多いのです。海外の軍事専門家が「ロシア優勢」と見たのも無理はありません。

ですから明治三十七年十月十五日、バルチック艦隊がバルト海のリバウ軍港を出港し、はるばる極東遠征に向かったことが報道されると、日本国内の心配は大変なものでした。私のおりました読売新聞でも、「将に来たらんとする波羅的艦

隊」と云うタイトルで、どんな艦隊がやってくるのか、軍艦の写真連載を始めています。それから七か月余り、日本の新聞にバルチック艦隊の記事が載らなっかった日はなく、どの港に寄ったとか、いまこの辺りを航海中だとか。そうした消息記事の後には必ず、気持ちを引き締めよとか、銃後の心得といったことが書いてありました。しかも広い海のことです。艦隊がどこへ行ったのか、何度も消息不明になり、余計心配が募ります。年が明けて三十八年四月八日、読売新聞では発行一万号の祝賀パーティーを開いていたのですが、そこへイギリス商船がシンガポール沖でバルチック艦隊を見たという電報が入ってきて、「とうとうやって来たか」というので、祝賀会どころではなく急遽号外を発行しています。

「皇后の奇夢」、美子皇后、後の昭憲皇太后が奇妙な夢を見たと云う新聞記事もあります。皇后が夜も眠れぬほど心配されていると、夢枕に白装束の武士が現われて平伏し「自分は幕末において多少の働きをした土佐の坂本竜馬であります。このたびの海戦は日本の勝利に間違いありません」と申し上げたと云うのです。皇后は竜馬をご存じありませんでした。これを聞いた土佐出身の宮内大臣田中光顕が、竜馬の写真を探し出してきてご覧に入れると、「確かにこの人だ」とおっしゃります。竜馬は神戸で海軍操練所、長崎で海援隊を作って、いわば日本海軍の基礎を作った男だ。その男が勝利を予言したのだから間違いないと、時が時だけにどの新聞にも取り上げられ、大変な評判になったのです。

皇后の見た夢を、誰か意図的に洩らさない限り、下々の新聞記者が知るはずもありません。これは国民の不安を鎮めるため、皇后を利用した田中の作り話でしょう。そして「明治維新は薩長土肥によって成った」。こう云われながら、田中の土佐は極めて影が薄いのです。政界、官界でもそうですし、陸海軍の出征軍の軍司令官、艦隊司令長官に土佐出身者は一人もいません。この機会に土佐と坂本竜馬を売り込みたい。そんな魂胆もあったのでしょうが、田中の策はズバリ当たって、それまでは一部の人にしか知られていなかった坂本竜馬は、今では若い人でも誰でも知っている幕末のヒーローになりました。田中は昭和十四年、九十六歳まで長生きしましたが、晩年になっても「あれは本当の話だ」と云っていたそうです。とにかくこんな記事が出るほど、「あんな大艦隊がきたら、日本は滅亡するのじゃないか」。国を挙げてノイローゼ気味になっていたのです。

ところが海戦の結果は、日本の大勝利でした。それも並みの勝ち方ではありません。対馬海峡を突破しようとしたバルチック艦隊は総数三十八隻。そのうち半分の戦艦六隻を含め十九隻を撃沈、戦艦など七隻を捕獲。後は逃走中に沈没したり、マニラや上海に逃げ込んで武装解除されたりして、目的地のウラジオストックに辿り着いたのは、駆逐艦など小艦艇たった三隻です。しかも司令長官ロジェストウエンスキイ中将以下六千人を超す将兵が捕虜になり、四千五百人が戦死したのに対して、日本の損害は水雷艇三隻沈没、戦死百十六人。まさにパーフェク

ト・ゲームでした。

第二艦隊の参謀としてこの海戦に参加した佐藤鉄太郎中佐は、「運だった」と云っています。戦いが終わった後、先輩から「どうしてあんなに勝てたのだろう」と聞かれて、「六分どおり運でしょう」。先輩も大きく首肯いて「僕もそう思う。しかし後の四分は何だろう」。「それも運でしょう」。「それじゃ全部運じゃないか」と先輩が云うと、佐藤は「最初の六分は本当の運です。しかし後の四分は人間の力で開いた運です」と答えたと云うのです。戦後、海軍大学校の教官になった佐藤は、戦術の講義で学生たちにこんなことを云っています。「東郷さんは不思議なほど運のいい人であった。戦いというのは主将、大将を選ぶのが大切である。主将がいかに天才でも、運の悪い人ではどうにもならない」。

開戦直前まで東郷は舞鶴鎮守府司令長官という閑職にいて、年も五十六歳。予備役、引退を待つばかりだった東郷を連合艦隊司令長官に抜擢したのは、薩摩出身の海軍大臣山本権兵衛です。当時の常備艦隊司令長官は、山本と幼友達で、才知もあれば勇気もあると評判の日高壮之丞中将でした。いざ戦争になって連合艦隊が編成されれば、誰もが日高がそのまま司令長官の椅子に座るものと思っていました。ところが意外にも、無口で地味な東郷です。そこにはこの大戦争にどう云う主将を選ぶべきか、山本の決断があったのです。

山本が東郷を電報で呼び出して、常備艦隊司令長官を要請したのは三十六年十月のことです。東郷はとっさに「ああ、戦争になれば連合艦隊司令長官だ」と思ったでしょう。簡潔に「よろしい、引き受けよう」と云うと、山本は「万事、中央の指図通りに動いてもらわねば困る。この点はどうだ」と念を押しました。東郷が「それはよい」と云って、山本に確認を求めたのは、「参謀だけは自分に選ばせてもらいたい。それから戦地に赴いたら、大方針は別として、その他の駆け引きは一切任せてもらいたい」。この二点でした。

「いよいよ時節到来」と張り切って上京してきた日高に待っていたのは、非情にも解任通告です。日高はいきなり腰の短剣を抜いて、「権兵衛、何も云わぬ。これでオレを刺し殺してくれ」と、山本の前に突き出したそうです。山本は諄々とわけを話しました。「お前の勇気と頭のいいことは、誰よりもこのオレがよく知っている。だが、お前には困った癖が一つある。何事にも自負心が強く、こうと決めたら決して他の云うことを聞かないことだ。ロシアとの戦いでは、作戦用兵の大方針は大本営で決定し、現場の司令長官はそれに従い、手足のように動いてもらわねばならない。艦隊が中央と違った行動をしたら、中央と艦隊は分裂したまま国家は滅びる。その点東郷は、少しの危険もない。大本営の命令を遵奉して過たぬと同時に、臨機の行動をとることも出来る。私情は私情、国家の大事には代えられぬ。このオレの気持ちもわかってくれ」。こう云う山本に、日高も最後は涙を浮かべて「わかった。貴様、よく云ってくれた」と、納得したそうです。

東郷が常備艦隊根拠地の佐世保に着任した時、猫背でトボトボ歩く、何とも風采のあがらない姿を見て、「こりゃあダメだ」と思った海軍士官が多かったそうです。明治天皇も意外に思われたらしく、理由を聞かれた山本は「東郷は運のいい男ですから」と答えたと云うのです。佐藤鉄太郎も山本も口を揃えて云う「運のいい男」。東郷について回った運の良さから、この日本海海戦の話を進めていきたいと思います。

大体が東郷は十年前、海軍大佐でクビの予定でした。明治二十六年の予備役編入リスト、その十六人の大佐の末尾には、病気がちで五年ほどブラブラしていた東郷の名前が書いてあったのです。五歳年下の山本は、階級は同じ大佐でも海軍省の官房主事。今で云う官房長を務め、「大佐大臣」と異名をとるくらい、つまり一介の大佐のくせにやることは大臣のように横暴だと、悪口の限りを浴びながら新しい海軍づくりに辣腕を振るっていました。その山本が海軍大臣の西郷従道、この人は西郷隆盛の弟ですが、西郷に迫って断行したのが年をとった幹部九十七人の首切りです。将官が八人もいて薩摩出身者も多く、明治維新の功労者ばかりです。太っ腹で知られる西郷も、さすがにひるんだそうですが、山本に云わせると、日本の海軍は「裸にダンビラを差したようなもの」。みんな維新の功労者で威勢だけはいいが、裸に刀といった古い頭では、どんどん近代化されてゆく軍艦を動かすことが出来ない。功労者には勲章をやればよい、実務につけると百害を生む。いざ戦さになって戦える海軍にするには、兵学校で基礎から新しい教育を受けた若手の海軍士官を登用しなければダメだと、山本は云うのです。

西郷の前で一人一人確認しながら、赤鉛筆で○印をつけていったのですが、最後の東郷のところへくると、なぜか山本が「この男はもう少し様子を見ましょう」と云い出したのです。西郷が「どこか嵌めておく所があるか」と人事局長に尋ねると、山本はその返事も待たずに、まるで自分が任命権者のような口振りで「横須賀に繋いである浪速にでも乗せておきましょう」と云ったそうです。その頃の日本海軍はお金がありませんから、普段は軍艦の半分を予備艦と云って保安要員を乗せているだけで、港につないでいました。新鋭巡洋艦の浪速も予備艦の一隻でしたが、その艦長としてクビがつながった東郷は、翌年の明治二十七年七月二十五日、有名な高陞号撃沈事件を起こしたのです。

浪速など三隻の巡洋艦が朝鮮・仁川沖の豊島で、清国の巡洋艦二隻とすれ違った時です。清国側の発砲で豊島沖海戦が始まったのですが、そこへやって来たのがイギリス国旗を掲げた汽船の高陞号です。東郷が停船を命じて調べさせると、船長以下三人のイギリス人が乗っているイギリス船籍の船ですが、清国にチャーターされ、兵隊や大砲を朝鮮に輸送中とわかりました。拿捕するため「浪速につい てこい」と命じると、兵隊たちが船長に銃を突き付けて騒ぎ出したのです。東郷は「即時船を退去せよ」と信号した上で、浪速のマストに赤旗を高く掲げさせま

した。これは戦時国際法で「これから砲撃する、危険なり」という合図ですが、東郷は船長たちが海に飛び込んだのを確認すると、砲撃を命じて高陞号を撃沈してしまったのです。日清戦争の宣戦布告は八月一日です。清国側の発砲で海戦が始まったとはいえ、宣戦布告の前にイギリスの船が沈められたと云うので、怒ったのはイギリスです。イギリスの新聞が「野蛮人の暴挙」とか、「極東の無法な国」といった激しい論調で一斉に非難の声を挙げれば、イギリス外務省も責任者の処罰を求めて厳重抗議してきました。清国と戦争を始めたばかりなのに、イギリスまで敵に回しては大変だと、日本国内は大騒ぎです。時の首相伊藤博文も「国家非常の時に、こんな軽率な軍人が出るのは残念至極」と大変な剣幕ですし、艦長を軍法会議にかけろとか、即時罷免すべしといった声も出てきました。

ところが東郷にとって、思いもかけない味方が、当のイギリスに現われたのです。国際法の権威で知られるオックスフォード大学の二人の学者が、「戦時国際法のいかなる条項に照らしても、浪速艦長の取った処置は適法であり、一点の非難すべきところもない」。こういう論文をロンドン・タイムズに寄せ、これを掲載したタイムズも社説で東郷の措置を支持したのです。これでイギリスの世論は一遍に収まりました。戦前、国際的な軍事記者として知られた伊藤正徳は、イギリス世論沸き立つ中で、きちんと正論を述べた学者、そしてそれを支持したタイムズの勇気を讃えています。世論というものは現金なもので、日本でも國賊扱いが一夜にして「国際法がわかる大した軍人だ」という評価に変わってしまいました。

東郷がどこで国際法を勉強したかというと、実はイギリスなのです。東郷は十六歳の時、薩摩とイギリスの戦争、薩英戦争で鹿児島がイギリス東洋艦隊の砲撃により火の海になるのを見ています。何しろこっちの大砲は、タドンを丸めたようなもの。一発撃つと大砲が後退りしてしまって、大砲を元の位置に戻さないと発射出来ない。向こうのアームストロング砲は、砲弾の先が椎の実のように尖っていて、スピードも速く威力も凄まじい。イヤというほどイギリス海軍の力を見せつけられましたから、東郷は新政府の海軍士官になると、明治四年志願して七年間もイギリスに留学したのです。そのうち二年間は、二十六の年を十六と十歳もサバを読んで、商船学校で勉強しています。ダートマスの海軍兵学校は外国人を入れてくれませんから、少年たちを対象にした商船学校に入ったのですが、東郷が一番よく勉強したのが国際法だったと云います。そしてオーストラリアなどへの遠洋航海に水兵として乗り組み、国際感覚を肌で身につけていったのです。

山本には、東郷が確信をもって行動したことが深く印象に残ったようです。伊藤正徳は「大海軍を想う」という本の中で、「山本海軍大臣の腹は遠く日清戦争の時から、将来国家の危急の時には、東郷と決めていたように思われる。大戦争の時には、無神経なほど物に動じない、闘志にあふれた大将が絶対であり、その点東郷の右に出る者はいなかった」と書いています。

物に動じない東郷を伝える、こんな話があります。初瀬、八島の二隻の戦艦がロシアの機雷に触れて沈没した三十七年五月十五日は、日本海軍最大の厄日でした。まず巡洋艦吉野が濃霧の中で、巡洋艦春日と接触して沈没しました。海軍大臣の山本は、開戦以来の勝利で油断が生まれたのではないかと、東郷司令長官宛てにかなり厳しい口調の叱責電報を打たせています。そこへ立て続けに初瀬、八島の悲報が飛び込んできたのです。昼食をとっていた山本も、さすがに動揺したのでしょう。「頬張ったご飯がノドを通らない。周りに心配を見せまいと、無理矢理飲み込んだ苦しさが未だに忘れられない」と話していたそうですが、でもそこからが山本の偉いところです。東郷宛てに「初瀬沈没の電報に接し、閣下と共にその悲しみを同じうす」。友情と激励に満ちた電報を打たせると、呉海軍工廠で巡洋戦艦筑波の着工、さらに日本では初めての潜水艇建造にかからせたのです。第一線の士気を奮い立たせるには、まず行動。失った軍艦以上の物を作ろうというわけです。

一夜で虎の子の戦艦を二隻も失って、全艦隊お通夜のように沈み切った中で、東郷はどうだったのでしょうか。報告に来た責任者の司令官や艦長たちは、東郷の顔を見ると言葉も出ずに大声で泣き出したそうです。やっと口をついて出たのは「お許し下さい」。東郷はただ一言、静かに「ご苦労であった」と言っただけでしたが、イギリス海軍の観戦武官として戦艦朝日に乗っていたペケナム大佐が、翌日こんな光景を目撃しています。巡視にやって来た東郷は、いつもと変わらない穏やかな顔だったそうです。足を固く踏みしめ胸を正しく張って、そこには前日の惨事の影は全く見られません。心配で眠れぬ一夜を過ごした将兵は、この東郷を見て、ペケナム大佐の言葉を借りると、「萎れた草花が恵みの雨にあって、一斉に頭を上げたように」俄に自信を取り戻していったと云うのです。ペケナム大佐は「敗戦を勝利に変えてしまうのは、往々にして主将のこうした自若たる態度だ」と云っていますが、東郷こそはまさに「将に将たる器」だったのでしょう。

その東郷が、後々まで「あの時はねー」と苦い顔を見せたのが、実は三十七年八月十日の黄海海戦でした。一言で言えば、旅順のロシア艦隊が日本艦隊の封鎖を破ってウラジオストックに逃げ込もうとし、それを阻止しようとした日本艦隊との海戦です。日本艦隊は、敵が決戦を挑んできたのだ、まさかウラジオへ行こうとしているのだとは、思ってもいません。午後一時過ぎから始まった砲撃戦で敵の進路予想を間違え、一時は三万㍍も離されてしまったのです。東郷はひたすら追い掛けるしかありません。そのスピードが十五ノット半、時速二十八キロです。ロシア艦隊は十四ノットですから、追いついたとしても午後七時すぎ。真夏とはいえすぐ暗くなって、そのままだったら恐らくウラジオに逃げられていたでしょう。ところが、ここでも東郷はついていました。戦艦のレトウィザンが故障で十二ノット半しか出せなくなり、遅れ出したのです。ロシア皇帝の命令は「戦

艦全部でウラジオへ行け」でした。専制国家ロシアでは皇帝の命令は絶対です。レトウィザンを置いていくわけにいかず、それに合わせてスピードダウンしたロシア艦隊に、東郷艦隊は午後五時半過ぎ追い付くことが出来たのです。

それから一時間、両軍は並んで走る形で猛烈な砲撃戦を展開しました。旅順艦隊はロシア海軍の精鋭を選りすぐっていましたから、勝敗はどちらに転ぶか、正直云って分からない形勢だったそうです。ところが午後六時三十七分、後々まで「運命の一弾」といわれる十二インチ砲弾一発が、先頭の旗艦ツェザレウィッチの司令塔に命中したのです。この一発が、司令塔にいた司令長官ウィトゲフト少将以下、艦長や幕僚たちを薙ぎ倒し、しかも舵を取っていた水兵が舵を左に取りっ放しのまま戦死しました。ツェザレウィッチは大きく円を描くようにして、左に回り始めます。まさか死人が運転しているとは思ってもいませんから、後続の軍艦も続こうとすると、そこへツェザレウィッチが狂ったように突っ込んできてロシア艦隊は支離滅裂になったのです。ツェザレウィッチは膠州湾に逃げ込んで武装解除されましたが、残る五隻の戦艦も旅順に舞い戻るのがやっとでした。

もしこの時、旅順艦隊が半分でもウラジオに入っていたら、日本の制海権は一遍に怪しくなり、しかもやがてやって来るバルチック艦隊との挟み撃ちにあう危険性がありました。まさに「運命の一弾」だったわけですが、実は東郷が乗っていた旗艦三笠も艦橋に三発の命中弾を受けているのです。三笠に行かれた方はご存じでしょうが、あの艦橋はびっくりするほど狭いのです。そこに三発も当たって参謀など六十数人の死傷者を出したのに、ほんの十ミリかそこらの違いで東郷は擦り傷一つ負っていません。東郷という人は、指揮官としての自分の役目は、艦橋に立ち尽くして死ぬことだと思っていたようです。周りが心配して「司令塔の中へ」と勧めても、「あそこは見えにくいのでねー」と聞きません。どんなに砲弾が飛んできても、微動だにせずに立ち尽くす。艦橋は波しぶきでびっしょり濡れているのに、東郷の立っていた所だけは、靴の跡がくっきり乾いて残っていたそうです。将兵が「この人なら」と信頼したわけです。東郷こそはまさに「運のいい男」であり、レトウィザンの故障も幸運なら、三笠がマストに敵弾を受けながらマストが倒れず、十五ノット半のスピードで追撃できたのも幸運でした。

旅順に逃げ帰ったロシア艦隊は、十二月六日に乃木大将の第三軍が二〇三高地を占領すると、そこからの砲撃で全滅しました。東郷は連合艦隊を率いて内地に帰り、バルチック艦隊を迎え撃つ準備にかかりますが、参謀長の島村速雄少将はこの機会に、艦隊首脳部の入れ替えを決断したのです。と云いますのは、開戦以来の勝利でそこそこの手柄をたてると、そこは人間ですから、勲章もほしいし命が惜しくなります。駆逐艦や水雷艇の攻撃にしても、今ひとつ腰が引けている感じで成果があがりません。島村は自らケジメをつける形で戦隊司令官に回り、参謀長を加藤友三郎少将と交代したのです。駆逐艦長などは総入れ替えで、このと

き代わっていないのは、主立ったところでは司令長官の東郷と作戦参謀の秋山眞之中佐だけだったと云います。

東郷の続投には、こんな話があります。明治天皇も出られた昼食会で、ある大将が海軍の自慢ついでに、「わが海軍には東郷に代わるべき者は、まだいくらでもおります」。こう云ったところ、天皇がすぐさま「まだ東郷は代えるべきでない」。周りがびっくりするほどの大声だったそうです。そして御座所に下がられてから、侍従に「東郷を代えてはならぬ。山本にそう申せ」と念を押されたと云うのです。東郷はこうしてバルチック艦隊との決戦に、明治天皇じきじきのお声がかりで臨むことになりました。佐藤鉄太郎のいう「六分の運」は、まさに日本艦隊の主将・東郷について回った感じがしますが、「残り四分の運」は、誰が、どのようにして開いたのでしょうか。

この戦争が始まる二年前、明治三十五年一月にイギリスとの間に結んだ日英同盟も大きかったし、科学力、技術力も威力を発揮しました。そして連合艦隊についていえば、勝利のシナリオを書き、艦隊をそのように持っていったのは作戦参謀の秋山眞之中佐だったのです。眞之はこの日露の戦いに全知全能しぼり切ったように、大正七年二月、五十歳を目前にして病死しました。すでに陸軍大将に昇進していた兄の秋山好古。この習志野の騎兵旅団を率いて、世界最強のロシアのコサック騎兵を破った好古は、その追悼会の席でこう挨拶しています。「弟眞之には、兄として誇るべきものは何もありません。ただ一つ私が云えるのは、眞之はたとえ片時でも、『お国のため』という観念を捨てなかったことです。このことだけは、兄としてはっきり言い得ることです」。

同じ席で、元帥になっていた島村速雄は、こう云っています。「日露戦争の艦隊作戦は、すべて秋山の頭脳から出たものです。彼の筆によって立案されたものは、ほとんど常に即座に東郷司令長官の承認を得ました。彼が様々に錯雑してくる状況を、その都度整理統一していく才能に至っては、実に驚くべきものがありました。彼はその頭に、こんこんとして湧き出て、尽きることのない天才の泉というものを持っていました」。まさに「知謀湧くが如し」とうたわれた、秋山眞之を送るのにふさわしい言葉です。

×　　×

日本海海戦といえば、大抵の方がすぐ思い出す有名な電文があります。「敵艦見ユトノ警報ニ接シ、連合艦隊ハ直チニ出動、コレヲ撃滅セントス。本日天気晴朗ナレドモ波高シ」。私なんかも夢中になって暗記したものでしたが、明治三十八年五月二十七日の朝、朝鮮南端の鎮海湾に待機していた連合艦隊旗艦三笠が、出撃に当たって東京の大本営に打電した、いわばこの海戦の開幕を告げる第一報です。大変歯切れがよく、リズム感のある言葉に、連合艦隊の決意と心の躍動がそのまま伝わってくる感じがします。電文の前半、「撃滅セントス」までを書い

たのは、秋山眞之の下で参謀をしていた飯田久恒少佐です。

海軍というところは、明治の初めにイギリス海軍の指導を受け、軍艦という理数系の頭がないと、動かない物を相手にしているせいでしょうか。現実認識を大切にし、肩をいからせての大言壮語を嫌う風潮がありました。戦争中でも平出英夫という海軍報道部長が「わが無敵海軍は」なんて言うと、苦々しげな顔をした海軍士官が多かったと云います。軍艦の名前にしても優しいですね。戦艦は国の名前、巡洋艦は山と川。誰にも親しみのある身近なもので、ことに気象とか草花からとった駆逐艦は、卯月、水無月、夕霧、春雨、野分に菫。「海軍はたるんでいる。待合の名前ばかりつけて」と怒った人がいたそうですが、その海軍がこれから始まる戦いに「撃滅」、みんなやっつけちゃうという、威勢のいい決定的な言葉を使ったのです。

これにはわけがありまして、前年の暮れ旅順のロシア艦隊を破った東郷は、参内して明治天皇に戦況報告しました。その際バルチック艦隊について聞かれた東郷は、「誓ってこれを撃滅致します」と答えたのです。普段から無口で地味で、大言壮語とはおよそ縁遠い東郷が、「撃滅」と言ったものですから、傍にいた海軍大臣の山本権兵衛もびっくりしました。天皇に対する言葉は絶対的な重みを持っていた時代です。大体が山本は、味方の半分は沈めても、何とか勝てればと思っていたくらいですから、「東郷のやつ、とんでもないことを言上して」と、この天皇との約束を何度もぼやいたと云います。東郷は「陛下の心配そうなお顔を拝していると、ああ云うよりなかった」と云ったそうですが、自分自身に撃滅を言い聞かせたのです。と云いますのは、いくら海戦に勝っても、戦艦の何隻かをウラジオに逃がしてしまえば、日本の海上交通は一遍に脅かされます。朝鮮海峡の補給路を断たれれば、満州で戦っている日本軍は干乾しになってしまうのです。となれば、バルチック艦隊の軍艦という軍艦は、全部沈めてしまうしかない。東郷のこの決意を知っている飯田参謀も、大本営に打つ電文には、東郷が明治天皇に約束した「撃滅」という言葉を使ったのです。

作戦参謀の秋山眞之はこの文案を見て一度はうなずきましたが、加藤友三郎参謀長の所へ行きかけた飯田少佐を、「待て」といって止めると、鉛筆でサラサラと書き加えたのが、後半の「本日天気晴朗ナレドモ波高シ」です。眞之が海の様子を見て、この一句を入れたわけではありません。それどころか、その朝は濃霧に近いほどもやった感じで、視界は十分でなかったと云います。実は眞之の机の上には、前日中央気象台が出した天気予報が載っていたのです。「戦いの運命を決するのは時には気象である」とは古くから言われたことですが、開戦と同時に気象台予報課長の岡田武松は戦時予報を担当、大本営に提出した予報は必ず旗艦三笠にも送られていました。九州沖合と旅順付近にある二つの低気圧。岡田は二十六日午前六時の天気図をにらみながら、これから出す予報が恐らくバルチック艦

隊との決戦の予報になるだろうと、予感していたそうです。考え抜いたあげく岡田が書いた予報は、「天気晴朗なるも波高かるべし」。眞之はこれを「波高シ」と断定した形で拝借したのですが、この一句をつけ加えたことで、単なる作戦用の文章が、情景躍動する文学になったと云う人もいます。飯田少佐は「あの一句を挟んだ一点だけでも、われわれは秋山さんの頭脳に遠く及ばない」と話していましたが、実はこの短い電文の中に、日本艦隊の勝因のすべてが語られており、ある意味では秋山眞之の勝利宣言でもあったのです。

眞之の九歳年上の兄さん、好古が色白で背が高かったのに対し、眞之はお母さんに似たのか、色黒で小柄でした。目が小気味いいほどに光っていて、走ると弾丸のように早い。小さい時からガキ大将で、大変なケンカ上手だったそうです。郷里松山の後輩水野広徳、この日本海海戦で「此一戦」という本を書いて有名になり、やがて「日米戦うべからず」を訴えて大佐で海軍を追われた水野は、日露戦争当時の眞之を「辺幅を飾らず、細行を顧みず」。外見を飾らず、細かなことにこだわらないと云うことですが、「挙措極めて無頓着。ダラシがないという方に近い」とも書いています。兄さんの好古は戦場でも水筒にブランデーを詰めて飲んでいたほど、大変な酒好きでしたが、眞之の方は煎り豆です。町を歩いていても三笠の作戦室でも、戦闘中の艦橋でも、所構わずポケットから煎り豆をつかんでは、ポリポリやっていたそうです。話が面白くないと思えば、人前だろうが何だろうが勝手に本を読んでいる。司令長官がまだ食事中だというのに、自分に用があればさっさと退席してしまう。真之の同期生は「傍若無人だが、秋山は我々の思いもつかないような、先を見ていた」と云っています。眞之の頭の中はロシアとの戦いだけでした。参謀長の加藤友三郎などは、苦々しげな顔をすることがしょっ中だったと云いますが、それでも類人猿でも飼っているつもりで、この独創的な戦術家に自由に腕を揮わせたようです。

松山中学以来の親友で、若い頃一緒に文学をやろうと誓い合っていた俳句の正岡子規は、大学予備門、今で云うと東京大学の予科ですが、その頃の眞之をひやかしてこん人物評を書いています。「伊予松山二人アリヤト問ハバ、君ハ自ラ我ナリト答ヘン。大学予備門二人アリヤト問ハバ、君ハ自ラ我ナリト答ヘン」。自信満々、若かりし頃の眞之ですが、その眞之が終生頭が上がらなかったのが兄さんの好古でした。前にも話しましたように明治維新の最中に真之が生まれましたが、お父さんは松山藩の下級武士です。子供が四人もいるのにとても食べていけないと、お寺に預ける話が出た時、「自分がおあしを一杯稼ぐから弟を寺へやらないでくれ」と頼んでくれたのが好古です。好古はこの九歳の決意を守るため、学費のかからない陸軍士官学校に入り、騎兵将校になったわけですが、真之には自分を松山中学から大学予備門に入れてくれた兄の苦労は、痛いほどよくわかっていました。眞之がせっかく入った予備門を一年で退学して海軍兵学校に道を転

じたのも、「いつまでも兄に甘えてはいられない」といった気持ちからでした。ですからどんな客がきても、床の間を背に傲然とふんぞり返っていた眞之が、好古にだけは座布団を丁寧に引っ繰り返して、その席を譲ったそうです。

ところで「艦隊の作戦は全て秋山に任せる」。三十半ばの眞之に寄せられた日本海軍のこの絶大な信用は、一体どこから生まれたのでしょうか。明治三十年六月アメリカに留学した眞之はアメリカとスペインの戦争、米西戦争に従軍して、その際軍令部に提出したサンチァゴ海戦のレポートが、正確な事実分析と鋭い観察力で、海軍上層部を驚嘆させたことに始まると云われます。眞之は明治の人には珍しく、常に結論から先に書き、要点に徹するのが主義でした。私なんかも新聞記者になった時、先輩からくどいほど「結論から先に書け」と云われたものでした。まあ私たちのは、下手な長い文章を途中でぶった切っても、意味だけはわかるようにしておけと云うことでしたが…。「極秘諜報第百十八号」と名付けられたこの報告は、アメリカ海軍の用兵に始まり、実戦に使われた近代兵器の効力を実地に測定して分析し、アメリカ艦隊がどう戦い、どのようにして勝ったかを明快に指摘したのです。後に海軍大学校校長となる坂本敏篤大佐は、「調教師が夢に描いた、幻の名馬に出会ったような気持ちになった」と云っています。その坂本がアメリカで真之に会った時、「君は海軍大学校に入らないのか」と聞いたところ、真之は不思議そうな顔をして「私に教える教官がいるのでしょうか」。云われてみればその通りで、真之は三十五年七月、その坂本に招かれて海軍大学校の初代戦術教官になったのです。海軍大学を出ないでその教官になったのは、恐らく真之くらいのものでしょうが、日露戦争が始まる一年半前のことです。

学生は眞之の同期生かちょっと下くらい。若い教官でした。坂本が最初に戦術教官に考えたのは後に海軍大将、海軍大臣になる八代六郎大佐でしたが、八代は「日本海軍、人多しといえども、あれくらい適任なやつはない」。こう云って、自分の代わりに兵学校時代の教え子である真之を推薦したのです。八代も聴講生として講義を聞きにきましたが、「人を見る」と云う点では、この八代にしろ、山本権兵衛にしろ、明治の人は偉かったなと思います。

眞之は大変カンのいい人だったようです。兵学校時代は試験の出題を当てる名人でした。「どうして分かるのか」と聞かれて、「教官が講義する時、よく注意していると、自分の好きな所とか大事な所は、教官の顔つきも物の言い方も違う。そこだけ印をつけておくと、試験には必ずそこから出る」と答えたそうです。とにかく兵学校では、勉強しないでもいつもトップでした。普通は学校を出ると勉強しなくなるものですが、眞之は卒業してから猛烈に勉強を始めたのです。軍艦勤務から上陸してくると、それまで読んでいた本は全部売り飛ばして、新しい本をしこたま買い込みました。真之はアメリカ留学が決まった時、一緒に外国へ行く四人の留学生、その中に旅順口で戦死して軍神と謳われた広瀬武夫もいたわけ

ですが、決意をこう話しています。「今までの留学生は、ただその国の海軍技術を身につけて帰ってきただけだ。これからは、あんなことではダメだと思う。わたしたちは外国から学ぶだけでなく、それを突破して、外国のエッセンスを自主的に使いこなせるようになるまで、抜け出さなければ嘘でしょう。わしはアメリカへ行くから、戦略、戦術といった方面で、それをやってみる積もりです」。一番後輩のくせに、まるでリーダーのように激励する真之に、他の留学生たちは毒気に当てられた形だったそうです。

真之は海軍戦略、戦術の大家として有名なマハン海軍大佐について学ぶことを考えていたのです。マハンが真之に真っ先に云ったのは、「自分の力で勉強しろ」と云うことでした。「第一に、過去の戦史を実例で調べなさい。戦史は古代も近代も、海上も陸上もひっくるめて、どうして勝ったか、どうして負けたか、勝敗の原因に目をつけて調べなさい。それからもう一つ、大家の立派な意見、尊い体験や疑い得ない法則を大家の著書から読み取りなさい。そうしているうちに、あなた自身の考えがしっかり生まれてくるでしょう」。真之はマハンの推薦した本は、片っ端から読んでノートをとりました。そんな中で真之が注目したのが新興のアメリカ海軍です。大砲にしろ設備にしろ、一番科学的に装備された海軍になっていたのです。そこから出した結論は、これからの海軍は科学的な知識と頭脳を持った将校が中心となって、指導しなければダメだということでした。

後に「秋山兵学」と呼ばれる眞之の戦術講義は、大変な名講義だったそうです。学生として真之の講義を聞いた山梨勝之進海軍大将、戦争中学習院長として今の天皇の教育に当たった人ですが、「戦略、戦術を体系づけた、飛び付きたくなるように魅惑的で、胸のすくような講義だった。アメリカ海軍の科学的方法と組織を日本海軍に導入したのは秋山だった。とにかく、のべつ頭が活動している人でした」と話しています。そしてその眞之が一番強調したのが、「戦術は生き物だから、人の書いたものを読んでも極められない。一人一人が自分の研究で会得するしかないし、またそういうものでなければ実戦で役に立たない」ということでした。しかし日本海軍も組織が大きくなるにつれ、法則が一つ出来ると、それが全てを縛っていくようになるのです。

真之が考えたのは、「六六艦隊」を一体化した総合戦力として使うには、どんな陣形をとったらいいのか。敵との距離はどれくらいに開くのか、どういう隊形をとると砲弾の命中率はよくなるのか。真之は考えに考え抜いて、独自の戦術を編み出したのです。ヒントは眞之が病気で入院した時、見舞いにきた先輩の小笠原長生少佐から借りた一冊の本でした。この人は幕末の老中、唐津藩主小笠原長行の子供で、昭和になってから東郷さんにべったりくっついて秘書となり、宣伝係のようなことをしていた人です。眞之が退屈しのぎに借りたのが、小笠原家に伝わる「能島流海賊古法」という兵書だったのです。南北朝の頃、瀬戸内海に勢力を

張った村上水軍。その流れをくむ能島村上氏の水軍戦法、「わが全力をもって、敵の分力、分かれた力を打つ」。これにヒントを得て、考え出したのが丁字戦法と乙字戦法です。

丁字戦法と云うのは、こちらの艦隊が横一線になって敵艦隊の頭を丁の字のように押さえ、砲弾を先頭の軍艦に集中して、立ち上がりざまに一隻か二隻を撃破する。残った軍艦が乱れたところに猛攻を加える。問題は、大砲の力が劣る六隻の一等巡洋艦です。ただこちらは戦艦より二ノット速い。このスピードを利用して、乱れかけた敵艦隊を戦艦戦隊に呼応して、乙の字のように挟み撃ちにしようと云うのが乙字戦法です。要は多角的に攻めると云うことで、開戦一か月前、連合艦隊の戦法として採用されました。眞之の講義を聞いて何度も何度も演習を繰り返し、完全に頭に叩き込んだ学生たちが戦争と共に参謀として第一線艦隊に配属されたのですから、まさに眞之の書いたシナリオ通り、全軍一糸乱れず行動できたわけです。

真之の作戦参謀起用には、こんな裏話があります。東郷は司令長官就任の際、山本に云ったように参謀は自分で選ぶことにしていましたが、しばらく艦隊を離れているので少佐、中佐クラスを知りません。そこで自分についてきた鎮守府副官の若い大尉に、「どんな人がいるか調べてほしい」と頼んだのですが、相談に乗ったのが人事局で「千秋和尚」とあだ名されるほど、面倒見のいい千秋恭二郎少佐です。副官が千秋の推薦した三人、海軍大学校の教官をした山屋他人中佐、日本海海戦を「運だった」と云った佐藤鉄太郎中佐、そして秋山真之の名前を提出すると、東郷は山屋の上に黒い線をスーッと引いたと云います。下馬評では戦術の大家として知られる山屋の名前が早くから上がっていましたが、東郷は数年前に艦隊演習をした時、東軍の作戦計画を立てた山屋が万事慎重に過ぎ、攻撃的な強さが足りないのが不満でした。逆に西軍の秋山真之は、荒天に見舞われた時の作戦転換が見事で、東郷には印象に残っていたようです。しかも真之の同期生の千秋が、「こいつは出来る。こいつに限る」。熱っぽく真之を推薦したことを副官から聞いたものですから、東郷の心はこの時決まったのです。真之の参謀は三十六年十月二十七日付で発令され、海軍は翌日常備艦隊を解散して連合艦隊を編成、日露戦争に臨む体制を整えたのです。

さてバルチック艦隊です。ロシア皇帝ニコライ二世が、艦隊の極東派遣を天下に公表したのは三十七年五月二十日ですが、最初は七月出港の予定でした。建造中の最新鋭戦艦オリヨールが六月末に完成するので、それを待ってということでしたが、ここでも東郷はついていました。不正工事が発覚して完成が遅れ、出発も十月十五日と大幅にずれ込んだのです。もし予定通り七月に出発していたら、あるいは旅順陥落前にやって来て大変なことになっていたかも知れません。

司令長官ロジェストウェンスキイ中将の前に待っていたのは、北海、大西洋、

そして大型戦艦は水深の浅いスエズ運河を通れませんから、はるばる喜望峰を回って、インド洋、シナ海と三万二千キロの大航海です。しかも結果的にこの航海が七か月余りもかかったのは、日英同盟が大きく物を云ったのです。遠大な航路の大半は、イギリスの勢力圏だからです。ロシアとしては、同盟国フランスの植民地、マダガスカルとインドシナの港が頼りでしたが、中立違反には日本はもちろんイギリスも厳しく目を光らせています。大体フランスがロシアと同盟を結んだのは、その強大な陸軍力でドイツを牽制したかったからです。ところがロシア陸軍が日露戦争で極東に釘づけになってしまい、フランスにとって頼りにならないとなれば、海を隔てたイギリスと仲良くするしかありません。そこでフランスは、日露戦争が始まるとすぐ英仏協商を結んだのですが、英仏関係を気にして、バルチック艦隊には極めて冷たく当たったのです。

この大航海はまた、石炭との戦いでもありました。一説には二十四万トンという膨大な石炭を使ったと云われますが、ロシアはドイツの船会社と契約して、百隻近い貨物船を雇い入れました。航路の要所要所にその船を配置して、石炭の供給を受けながら、飛び石伝いに極東へ向かう。こう云う計画でしたが、まず石炭の確保で躓いたのです。当時世界で最も良質な石炭は、煙が出ずカロリーも高いイギリス・ウエールズ地方のカーディフ炭でしたが、日本が日英同盟の誼でいち早く大量に確保したのに対し、ロシアは焚くと真っ黒な煙が出て、品質も劣るドイツ炭がほとんどでした。石油なら今海上自衛隊がインド洋でやっているように、ホース一つで洋上を走りながら供給出来ますが、石炭はそうはいきません。軍艦を止めてハシケに石炭を積み替える。この粉塵だらけの作業を、三日か四日ごとに繰り返さなければなりません。

しかも三十七年の暮れ、マダガスカルに着いたバルチック艦隊を待っていたのは、フランス政府のディエゴスアレス軍港への入港拒否だったのです。軍艦の修理も出来ず、乗組員の上陸休養も取れないまま、マダガスカル北端の漁村ノシベに停泊することになりました。そこへ日本から中立国違反を指摘されたドイツの船会社が、石炭船の同行を断ってきたため、その手当てに炎熱地獄のノシベに二か月半も滞在する羽目になったのです。病人は出る、軍紀はゆるむ。マライヤという巡洋艦では、暴動騒ぎも起こりました。

さらにロジエストウエンスキイの不幸は、ネボガトフ少将の増援艦隊派遣が決まり、インドシナのカムラン湾で合流するよう、皇帝から命令されたことです。バルチック艦隊がカムラン湾に着いたのは三十八年の四月十四日ですが、ここでもフランスから領海内停泊を断られ、増援艦隊を待って一か月も近くの海をうろうろする結果になりました。しかもこの増援艦隊というのが「海に浮かぶアイロン」と酷評されたほど、スピードの出ない老朽艦ばかり。一緒に艦隊行動をとろうとすれば、これに合わせてスピード・ダウンしなければならないのですから、

バルチック艦隊にとってはお荷物以外の何物でもなかったのです。

こうしてバルチック艦隊が最悪に近い状態で、運命の対馬沖へと向かったのが五月十四日でした。　眞之の考えた作戦は、大砲で戦う砲戦四回、駆逐艦や水雷艇による夜襲三回。ウラジオまで七段構えの連続戦闘で、徹底的に叩くことでした。ただ眞之が唯一迷ったのは、バルチック艦隊が一体どの航路をとってやってくるかです。ウラジオへのコースは、三つ考えられます。最短距離が対馬沖を抜けるコース。すぐそばの鎮海湾に日本艦隊が待機していることはロシアも知っていますから、ここを通るなら決戦覚悟。何とか日本艦隊の目をごまかし、戦闘時間をなるたけ短くして、とにかくウラジオへ逃げ込もうとすれば、津軽海峡か宗谷海峡を通るコースです。またスピードの速い主力艦隊を対馬、残りを津軽海峡と、艦隊を二つに分けたり、あるいは太平洋へ出て小笠原を占領し、そこで様子を見ながら津軽海峡を抜けることも考えられました。

ところが十四日にカムラン湾を出たはずのバルチック艦隊が、待てど暮らせどやってこないのです。対馬へ来るなら、当然日本の警戒線に引っ掛かっていいはずなのに、杳として消息が知れません。この頃の眞之は作戦室のソファーで軍服を着たまま、靴もはいたまま寝ていたそうです。バルチック艦隊は津軽海峡へ回ったのではないか。眞之の心は乱れに乱れたのです。司令官や艦長の中からは、「早く函館に行った方がいい」と云った声も出てきました。連合艦隊司令部は二十五日朝、翌日になっても敵艦隊が見えなければ北への移動を決意、軍令部に報告すると共に、会議を開いて戦略変更を説明したのです。島村少将や第二艦隊の参謀長は「敵は必ず対馬に来る」と反対しましたし、軍令部も移動には反対で「特に慎重に考慮せられんことを希望す」と電報してきました。しかし結局、二十六日正午になっても敵艦隊が見えなければ、夕方からの北方移動を決定、軍令部にもそう打電したのです。各軍艦には密封命令と云って、封筒に閉じた移動命令書が渡されましたが、封筒を開く時間、出発時間は信号で命令するとされました。

まさに間一髪だったのです。バルチック艦隊が二十六日正午まで我慢していたら、日本艦隊が移動して空っぽになった対馬海峡をらくらく抜けられていたでしょう。ところが、ここでも東郷はついていました。ロジェストウエンスキイが、「千慮の一失」ともいうべきポカを冒してくれたのです。二十五日朝、決戦に備えて洋上で石炭を補給した後、足手纏いになる運送船六隻を上海に向かわせたのです。「運送船が二十五日夕刻上海に入港した」と云う情報は二十六日未明、上海総領事館から軍令部に入ってきました。「石炭船が上海に入ったということは本隊は近くにいる。対馬に来るに違いない」。迷いに迷った連合艦隊も津軽海峡への移動を見合わせ、鎮海湾で待機を続けることにしたのです。

戦後になってからですが、小笠原長生が東郷に「なぜ北方移動の電報を打ったのか」と聞いたところ、「オレはそかん電報は知らん」と云います。「では長官はど

こへ来ると思っていたのか」と尋ねると、東郷は即座に「そりゃあ対馬さ」。ですから「東郷はあくまで正しい判断をしていた」と云うのが定説になっていますが、加藤参謀長や真之が、こんな重大な決定を東郷に無断でするはずもありません。この話はやはり「神様の東郷に傷をつけてはいけない」と、東郷の宣伝係をしていた小笠原の情報操作だったように思います。

それにしても、バルチック艦隊はなぜ五月二十七日に対馬海峡にやって来たのでしょうか。実は二十六日は、ロシアの暦でキリスト教徒の嫌う十三日でした。翌日の十四日、つまり二十七日は、皇帝ニコライ二世が戴冠式をあげた記念すべき日だったのです。長年皇帝の侍従武官を務め、信任の篤いロジェストウエンスキイ中将は、最初からこの皇帝戴冠の佳き日に、戦艦八隻の威力で対馬海峡を強行突破しようと、二十七日に合わせて時間調整をしながら、対馬海峡へと向かっていたのです。

海戦ではいかに早く敵を発見するかが、勝敗の別れ目になります。日本海軍はこの決戦に、戦艦から水雷艇に至るまで百二十五隻の艦船を動員しましたが、このうち六割近い七十三隻を敵艦隊発見のパトロールに当てたのです。真之は佐世保から朝鮮の済州島を結んだ線、その南に一辺三百キロの正方形を描いて、碁盤の目のように細かく刻んだ哨戒海域に、その七十三隻を投入しました。二十七日午前二時四十五分、そのうちの一隻、仮装巡洋艦の信濃丸が暗闇にポツンと浮かぶ明かりを発見したのです。信濃丸は太平洋航路の客船でしたが、海軍に徴用されて大砲一門を積んだ俄仕立ての巡洋艦として哨戒活動に当たっていました。敗戦後は南方からの復員船として大変く働いた船です。その信濃丸が全艦隊無灯火の夜間航海で、ただ一隻病院船のつけていた明かりを見つけたのです。敵かも知れない。正体を確かめるため接近しますが、物凄い濃霧でわかりません。夜が白んで霧が少しずつ晴れてきた時、誰かの叫び声がしました。右舷にも左舷にも、それどころか前にも後にも、大小無数の軍艦が煤煙を吐きつつ進んでいたのです。驚いたことに、信濃丸はバルチック艦隊の真っ只中にいたのです。「敵ノ艦隊見ユ地点二〇三」。電波は四方に飛びました。時に午前四時四十五分。二〇三地点というのは、東経、北緯何度何分と、その地点がどこかすぐわかるようにした哨戒海域の符号ですが、偶然にも旅順攻略の突破口となった二〇三高地と同じ数字です。みんな「縁起がいい」と大喜びしたそうです。

信濃丸は撃沈覚悟で接触を続け、午前六時五分「敵進路不動、対馬東水道ヲ指ス」と、決定的な報告を送りました。後を引き継いだ三等巡洋艦和泉も、六時間もバルチック艦隊に食い付いて離れず、軍艦の数、陣形、位置、さらに煙突を黄色く塗っていることなど、実況放送さながらに無電を打ち続けたのです。煙突の黄色い軍艦はすべて敵ですから、乱戦になっても同士討ちの心配がありません。東郷と真之だけではなく、日本の全艦隊がまだバルチック艦隊の姿を見ないうち

から、その全容を知り尽くしていたのです。

信濃丸の「敵艦見ユ」は、対馬にいた巡洋艦の厳島がキャッチし、午前五時五分三笠に中継されました。ちょうど起床ラッパが鳴ったばかりで、甲板に出ていた眞之は、「しめた、しめた」と片足で立って、阿波踊りのように両手を振って踊り出したそうです。眞之がつけ加えた電文、「本日天気晴朗ナレドモ波高シ」は単なる気象報告ではなく、「海戦はこのように展開し、勝ちますよ」という勝利宣言でした。

天気晴朗ということは、これまでロシア艦隊を何度も逃してきた濃霧の心配がなく、戦闘時間がたっぷり取れる。視界がいいから命中率も高くなる。何しろ三笠だけで三万発という、普通なら一年分の訓練用弾丸を十日間で使い果すほど、猛訓練をしたのです。しかも火薬が凄い爆発力を誇る「下瀬火薬」ですから、撃滅の可能性が出てきます。波が高いということは、長い航海をして訓練も不十分なバルチック艦隊には、射撃一つとっても不利です。軍艦の横っ腹は吃水線といって、水面についた辺りの装甲を一番厚くしているのだそうです。ところがバルチック艦隊は石炭を満載していますから、吃水線が下がり、厚い装甲帯もそのまま水面下に潜ってしまい、弱い部分がむき出しになる。横っ腹に穴が開けば、激浪に洗われて海水がなだれ込み、沈没する船が続出するだろう。日本海海戦は、まさにこの眞之の読み通りに進んだのです。

東郷艦隊は北から、バルチック艦隊は南から。お手元の資料に戦闘経過を書いておきましたが、両軍の距離が一万二千㍍になった午後一時五十三分、三笠のマストに「皇国ノ興廃此一戦ニアリ、各員一層奮励努力セヨ」で有名なZ旗が掲げられました。Z旗と云うのは、対角線を黄、赤、青、黒の四色に仕切った旗で、東郷も真之もイギリスへ行った時、ネルソンの記念艦ヴィクトリー号のマストに高く翻る信号旗、「英国は各自がその本分を尽くすのを期待す」を見ています。真之が数日前、艦隊の士気を上げるため、Z旗が揚がったらその意味はこう云うことなんだと、各軍艦の信号書に鉛筆で慌ただしく書き加えたものでした。Z旗を見た各艦では艦橋から伝声管や伝令によって大声で伝えられ、「いよいよ決戦だ」と大いに士気が上がったそうです。

そして二時七分、距離八千㍍で「東郷ターン」と云われる敵前Uターン、つまり丁字戦法で、バルチック艦隊の頭を押さえにかかったのです。しばらく撃たれっぱなしになっていた三笠が、砲撃を開始したのが二時十分。旗艦スワロフをはじめ、オスラビアなどがたちまち大火災に包まれました。戦いは翌日の夜まで続きますが、大勢は最初の三十分で決したと云われます。

「人間が開いた四分の運」。その筆頭に挙げるべきは日英同盟でしょう。バルチック艦隊に満足な港も休養も与えず、戦う前から疲れさせてしまった、外交の勝利でした。何しろリバウ軍港を出てから七か月半、一度もドックに入る機会がな

く、船底を洗ってないのですから、これではとてもスピードが出ません。そして科学力、技術力の勝利でもありました。イタリアの青年マルコーニが無線電信を発明したのは一八九五年、明治二十八年です。それからわずか十年後に、その無電で日本海海戦を制する成果をあげたのです。「二つの地点の通信に、電線の代わりに電波を利用した」。こんなアメリカの科学雑誌に載った、マルコーニの成功を伝える雑報扱いの小さな記事に注目した人がいたのです。目に見えない電波はまだ架空の物と考えられていた頃で、石橋絢彦という逓信省の局長でした。石橋の指示で研究にあたった逓信技師松代松之助は、二年後の明治三十年暮れ、東京の月島海岸と品川沖の間、距離にしてほんの二キロという短いものでしたが、日本で初めて海上の無電実験に成功したのです。

当時アメリカ留学中だった秋山眞之も、こうしたことには敏感でした。マルコーニが嵐の英仏海峡で百三十キロの通信に成功したことを知ると、ニューヨークにやってきたマルコーニのインタビュー記事を海軍省に送り、艦隊通信に無電を使うよう提案しているのです。海軍大臣の山本権兵衛もさっそく動きました。海軍に嘱託として招かれた松代技師は、木村駿吉博士らと協力して百三十キロの通信が出来る無電機開発に漕ぎ着けました。日露戦争前年の三十六年秋のことで、突貫工事で無電機製作を急ぎ、ほとんどの軍艦に配備を完了したのは開戦半月前だったそうです。太平洋戦争でレーダー開発に遅れを取り、散々な目にあったことを考えると、明治の人がいかに新知識、新技術の吸収に真剣であったかがわかります。

海軍の秘密兵器、「下瀬火薬」の威力も凄まじいものでした。海軍技師下瀬雅允が明治二十一年に開発した新型火薬です。急激なショックを与えると、猛烈な爆発力を持つピクリン酸を使ったのですが、砲弾に使うには酸化力が強すぎて自然発火してしまい、なかなか実用になりませんでした。下瀬が目を付けたのは、酸には滅法強い日本古来の漆です。これを砲弾の内側に塗って、ピクリン酸の完全分離に成功したのです。爆風で人間や構造物を吹き飛ばしただけでなく、気化したガスが三千度の高熱を撒き散らし、鋼鉄に塗ったペンキにまで引火して、軍艦が燃え上がりました。海水にぶつかっただけでも炸裂して船腹に穴を開け、大砲を囲った砲塔も溶かしたと云います。長いこと軍事機密とされ、太平洋戦争で真珠湾攻撃に使った航空魚雷も、この下瀬火薬の改良型だったそうです。そしても一つ忘れてならないのが、海軍大臣の山本権兵衛です。事前の周到な準備、司令長官に東郷を起用した人を見る目の確かさも、勝因の一つでした。

それにしても、ロジェストウエンスキイには、どうして、なぜといった疑問がたくさんつきまといます。足手纏いの運送船を艦隊から離したのは良いとして、なぜ本隊が対馬海峡を通過するまで上海入港を待たせなかったのか。そうしていたら日本艦隊の裏をかいて、無事ウラジオに入っていたでしょう。それでいて、

戦闘には直接役に立たない病院船を同行したのはなぜか。貴族趣味のロジェストウエンスキイは、ウラジオへ行っても満足な病院施設がないだろう。それで最後まで病院船を放さなかったと云うのですが、その病院船のただ一隻点けていた明かりが、バルチック艦隊発見のキッカケとなりました。明治三十二年のハーグ条約では、病院船認識のため夜間点灯を義務付けていますが、諸事規定に喧しいロジェイウエンスキーは、国際公法に従ってそれを守らせたようです。巡洋艦ウラルには強力な無電機を積んでいました。妨害電波を発射することも出来たし、第一信濃丸や和泉をいつでも撃沈出来たのです。なぜ砲撃許可の要請に、「撃つな」と命令したのか。弾丸の無駄遣いを惜しんだのか、大事の前の小事、雑魚を沈めても仕方がないと思ったのか。

ノビコフ・プリボイというロシアの作家がいます。戦艦オリヨールに水兵として乗り組み、昭和八年「ツシマ」という本を書いて、第一回スターリン文学賞を受賞した人ですが、この本を読むと、「ロジェストウエンスキイのなぜ」の幾つかが分かります。例えばオリヨールの艦長は航海経験も豊かで、真面目な勇気もある海軍士官でしたが、帆で走る帆船時代の旧海軍に育った人でした。新式戦艦の機械や装置が精巧であればあるほど全くわからず、近寄らなかったそうです。距離を測る測距儀も最新式のものを積んでいたのに、いくら測っても距離が合わず、とうとう実戦で使うのをあきらめてしまいました。日本の海軍は、山本権兵衛が十年前に若手に切り替えていましたが、ロシアは近代化についていけない艦長が軍艦を動かしていたのです。

ロジェストウエンスキーの頭にあったのは、皇帝に対する忠誠心だけだったようです。ちょっと信じられないことですが、日本艦隊を目前にして彼が全艦隊に信号で知らせたのは、「きょうが皇帝戴冠の佳き日」ということだけでした。どの軍艦でもピーッと笛が鳴って甲板に水兵たちが集められ、皇帝への祈りを捧げたと云うのです。来たるべき戦闘に、ロジェストウエンスキーがどんな作戦を立てているのか、艦長や参謀の誰一人知る者もなく対馬海峡へと向かったのです。戦いが終わってみれば、負けるべくしてやってきた艦隊でした。

ポーツマスで講和条約が調印され、連合艦隊は明治三十八年十二月二十日解散しました。三笠は火薬庫の爆発事故で沈んでいて、旗艦は戦艦朝日に代わっていましたが、翌日の解散式で東郷はとつとつとした低い声で、有名な「連合艦隊解散の辞」を読み上げたのです。「二十閲月の征戦已に往時と過ぎ」で始まる文章は、秋山眞之が一気に殴り書きしたと云われるます。これを読んで感動したアメリカのルーズベルト大統領が、翻訳させて陸海軍の全将兵に配ったというほど、格調も高く、若いころ文学を志したという眞之の面目躍如たるものがあります。しかし、活字で見ても難しいですね。明治の人に比べて、つくづく教養の土台がないことが恥ずかしくなります。眞之は戦後の軍人の心構えとして、錬磨と同時

に将来の進歩をはかり、時勢に遅れるなと説いています。「神明は唯平素の鍛練に力め、戦はずして既に勝てる者に勝利の栄冠を授くると同時に、一勝に満足して治平に安ずる者より直に之を褫ふ。古人曰く勝て兜の緒を締めよと」と結んでいます。残念ながら一勝に満足して、兜の緒を締め忘れたのは当の日本でした。

その意味では、日本海海戦は勝ち過ぎてしまったのかも知れません。「勝った勝った」で酔い痴れているうちに、「人間が開いた四分の運」を合理的に分析し、将来に生かすことを忘れてしまったのです。日本海海戦は、大きな軍艦の大きな大砲による、「大艦巨砲時代」の幕開けを告げるものでしたが、いち早くこの教訓を生かしたのはイギリスです。翌年の三十九年暮れ、十二インチ砲を十門も積んで、しかも二十一ノットという快速戦艦ドレッドノートを建造したのです。日本が最新鋭戦艦の積もりで造っていた十二インチ砲四門の安芸、薩摩は、一夜にして旧式戦艦になってしまいました。ドレッドノートの頭文字をとって弩級戦艦と云いますが、そのショックがどれほど大きかったか。日本の体操が華やかな頃、難しい素晴らしい演技を「超弩級の演技」なんて云いましたが、そんな言葉に残っていたことでもわかります。そして列強海軍はそれを上回る超弩級戦艦、日本で云えば長門、陸奥がそうですが、軍備拡張競争が始まっていきます。

太平洋戦争の時もそうでした。日本海軍は、航空母艦中心の機動部隊を編成してハワイ真珠湾を攻撃、「航空機の時代」という、革命的な新しい時代への扉を開いておきながら、その本当の意味を掴んでいませんでした。相変わらず最後の勝敗を決するのは艦隊同士の決戦だと、もう飛行機の時代が来ているのに、日本海海戦の「勝利の亡霊」から抜け出せなかったのです。逆に素早く頭を切り替えたのはアメリカでした。大型戦艦の建造を中止して航空母艦に振り向け、その航空力に日本は完敗したのです。

日本海海戦は、日本海軍が世界最高水準の軍艦で戦った海戦でした。無電や火薬もそうでした。その勝利は、外交の力、科学、技術の力なしには語れないのですが、日露戦争を境にして総合力を大切にする気持ち、さらには現実的なバランスの取れた物の見方が後退していきました。精神主義が幅をきかすようになりました。「百発百中の砲一門、よく百発一中の砲百門を制す」。連合艦隊解散の辞で秋山眞之が譬えに使ったこの言葉が、昭和の軍人に大きな影響を与えるようになりました。常識で考えたって、どんなに訓練を積んだ優秀な大砲でも、たった一門では百門にかなわないことは、分かり切ったことなのです。眞之は訓練の大切さと同時に、時代の進歩に遅れるなと説いていたのですが、昭和の工業力の貧しさでしょうか、精神主義だけが強調されてしまいました。そして段々常識的な物の見方、総合的な物の考え方が通用しなくなったところに、日本の大きな躓きがあったように思います。